

Title	狂言台本における尊敬表現形式「オーナサレマス」について：鷺流狂言台本『保教本』を中心に
Author(s)	米田, 達郎
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 20-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68973
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

狂言台本における尊敬表現形式「オーナサレマス」について

——鷺流狂言台本『保教本』を中心に——

米田達郎

はじめに

一八世紀初頭の狂言は古典劇化しつつあり、それに伴い狂言台本詞章も固定・伝承されていくことがすでに先学によって指摘されている。¹⁾しかし、本稿で中心資料として扱う鷺流狂言台本保教本(享保元年く享保九年筆写 以下『保教本』)には、基本的には狂言台本詞章を固定・伝承しつつも、狂言台本詞章筆者の独自の姿勢が見取れる。これについては先に、筆写当時の口頭語で最も待遇価値の高い対称代名詞「オマエ」(以下「オマエ」)が『保教本』に多く見られ、それが各流派の狂言台本詞章と比較した場合、『保教本』の言語的特徴であり、そして「オマエ」を取り入れた背景に『保教本』の狂言台本詞章に対する特徴的な態度があることを指摘した。本稿では、この結果を受けて、「オマエ」に対応する尊敬表現形式として近世前期上方から使われた「オーナサレマス」を取り上げる。「オーナサレマス」は『保教本』や鷺仁右衛門派に属する『延宝・忠政本』(延宝六年頃筆写)、『保教本』と同じく鷺伝右衛門派に属する宝暦『名女川本』(宝暦一年頃筆写 以下『名女川本』)に多用されているが、今回比較対象とした大藏流・和泉流の狂言台本詞章に

はあまり見られない。後述するが、『保教本』では「オマエ」と同様に、『保教本』の狂言台本詞章に対する特徴的な態度のために近世前期上方で用いられていた「オーナサレマス」を狂言台本詞章に取り入れていると推測されるのである。また、「オーナサレマス」は「オマエ」と異なり、『保教本』のみに限られた言語的特徴ではなく、『保教本』よりも後に筆写された『名女川本』でも多く見られることには注意を要する。つまり、この尊敬表現形式は広く鷺伝右衛門派における特徴とも捉えられ、「オマエ」の場合と状況を異にするのである。この点は、狂言台本詞章が固定・伝承していくと言われる中で、相反する様相を呈しており待遇表現の変遷に関わる興味深い事実であるといえよう。

一 問題の所在

次頁に挙げた【表一】は対人関係に着目して作成した『保教本』における対称代名詞と述部との待遇表現対応表である。【表二】は山崎久之氏が大藏流狂言台本『虎明本』²⁾(以下『虎明本』)を調査され、まとめられた対称代名詞の待遇表現体系表を私にまとめ直したものである。両表は紙幅の都合で簡略化してある。さて、両表を見比べ

【表一】『保教本』の対称代名詞の主体待遇表現対応表

動作主	動作主への待遇表現		対者待遇語
代名詞	文末表現	行く・来る	
おまえ	おーなされます	おいでなされます	せられます
こなた	おーなさる	御座ります	せらる
そなた	おーやる	おりやる	らる・まする
わごりよ	ーやる	おりやる	ます・ーぞ
そち	ーおる	行く・来る	ーやい
なんじ	おる	行く・来る	ーやい・ーか
おのれ		うする	

【表二】『虎明本』の対称代名詞の主体待遇表現対応表

動作主	動作主への待遇表現		対者待遇語
代名詞	文末表現	行く・来る	
こなた	おーなさるる (さ)せらるる	御座る	まらする
そなた	おーそい	おりやる	まらする
わごりよ	ーやる さしめ	行く・来る わする	
おぬし		行く・来る	
そち		行く・来る	
なんじ		うする	
おのれ	おる		

ると、『保教本』に「オマエ」段階が設定されているために明らかに待遇表現体系が異なっており、同時に『保教本』には『虎明本』に見られない語がある。本稿では、これらの語のうち、文末表現として分類している尊敬表現形式「オーナサレマス」を取り上げる。⁽⁵⁾

山崎久之氏の調査によると「オーナサレマス」は、近世前期上方から最も高い待遇価値を持つ語である(【表四】参照)。狂言が古典劇化しつつあった一八世紀初頭に、近世前期上方で用いられていた「オーナサレマス」が高い待遇価値を持つて狂言台本詞章に見られるというのは注目できる。次に挙げる【表三】は今回調査対象とした狂言台本における「オーナサル」をそれに下接する語別に分類・整理したものである。右側には狂言台本を流派を問わずに、上から筆写された時代の古い順に並べている。数値は、話手が聞き手に対して直接用いた場合(動作主は聞き手)のみを数えたものであり、各欄にある括弧内の数値はそれぞれの狂言台本における命令形の数値である。用例は「御(オ・ゴ)十動詞連用形・体言十ナサル十下接語」の形式のものを採取し、「御意」などの一語化していると思われるものや助詞などが間に用いられているものは省いている。【表三】を見ると、下接語の付かない例が諸本において多く見られるのに対して、⁽⁶⁾驚流に属する狂言台本に下接語が付いている例が多く見られることには注意する必要がある。特に「オーナサレマス」は、『保教本』をはじめとする驚流の狂言台本に際だつて多い。このような状況は、『保教本』が近世前期上方で使用されていた「オーナサレマス」を取り入れた結果であると推測できる。そしてその背景には、『保教本』で述べられる狂言台本詞章に対する特徴的な態度との関係が指摘できるであろう。本稿ではこの事を明らかにするために、『保教本』

【表三】「オーナサレ」とその下接語の状況

	虎明本	天理本	延宝忠政本	保教本	名女川本
下接語なし	35 (4)	16 (2)	19 (1)	66 (6)	63 (37)
マス(ル)	1 (0)	0	6 (5)	90 (56)	66 (50)
テ御座ル(マス)	0	0	0	21 (5)	7 (0)
テ下サル(マス)	0	0	0	12 (2)	18 (13)
計	36 (4)	16 (2)	25 (6)	189 (69)	154 (100)

における「オーナサレマス」を中心として、まずそれらの用法を概観し、『虎明本』や和泉流狂言台本『天理本』(以下『天理本』)などとの四座に属する流派の詞章との比較を行った上で、近世前期上方の口頭語を比較的反映していると思われる近松の世話浄瑠璃の用法と比較する。そして最後に「オーナサレマス」を多用する『保教本』の資料的性格について考察をしていくことにする。

二 『保教本』における「オーナサレマス」

今回『保教本』の待遇表現体系を対人関係の点から調査すると、「オーナサレマス」は【表一】に示したように「オマエ」段階に属し、最も高い待遇価値を持つことが明らかとなった。では、どのように「オーナサレマス」が使用されているか、具体的に用例をみてみよう。

1 (太郎冠者が主人に雇う人数を減らすよう進言する場面)

是ハ餘イカイ事テ御座リマスル少御減被成マセウ

(「今参」太郎冠者↓大名)

2 (取り手の言葉を聞いたかどうか太郎冠者が大名に確認をとる場面)

無分別ナ入ヌ物シヤカ御聞被成マシタカ

(「鼻取相撲」太郎冠者↓大名)

3 (成人した孫が祖父を呼び出す場面)

先ツコレへ御出被成マセイ

(「薬水」孫↓祖父)

4 (借手が貸手にお金をきっちり返済することを伝える場面)

イヤ夫ハ押付埒ヲ明ケマスル御氣遣被成マスルナ

(「八句連歌」借手↓貸手)

(傍線部は私に施した。以下同じ)

『保教本』において「オーナサレマス」は90例見られるが、そのうち56例が主に用例1・2のように従者から主人などの主従関係およびそれに準じる関係において、畏まった場面で使用される。例えば用例1では、上機嫌の主人に対して機嫌を損ねないように太郎冠者が丁寧な口調で接している。用例2も同様に丁寧な口調で主人に進言している場面である。また用例3などのように下位者が単に位相的に上位の人物に対しても用いる場合がある。その場合でも用例1などと同様に、畏まった場面で使用される。用例4は、話手と聞き手とは共に上層町人であり、位層的には同等であるにも関わらず「オーナサレマス」が使用されている。用例4は金銭の返済を貸手が借手に求めている場面であるので、それに応答する借手は貸手に対して畏まっていると考えられ、そのためにより待遇価値の高い表現が選択されたものと言えよう。

『保教本』における「オーナサレマス」は基本的に主従関係において用いられる傾向があるものの、位相的に上位にある人物などに

対しても使用される。そして、「オーナサレマス」が使用される場合は、必ず何らかの理由（主従や恩恵など）のために、話手は聞手に対して畏まっているといえるであろう。

さて、『保教本』には【表三】より「オーナサレマス」以外に、『虎明本』や『天理本』には見られない、「オーナサル」に下接語の付いた例が次のように見られる。このような状況は『保教本』の特徴といえるであろう。

5 〔太郎冠者が主人の子（山伏）を出迎える場面〕

扱々久敷テ御出被成テ御座ル

（腰折）太郎冠者↓山伏

6 〔太郎冠者が主人の友人に祇園の出し物を考えるように依頼する場面〕

何茂ノ中カラ仰出サレテ御談合被成テ下サレマセイ

（鬪罪人）太郎冠者↓主人友

用例5・6はそれぞれ「テ御座ル」「テ下サル」の付いた例である。いずれの場合も、対人関係の観点から見ると、「オーナサレマス」の用法に準じる。但し、「テ下サレ」が下接する場合は、「この語の性質上、他のものと比べて強い依頼を表し、他の形式とは意味合いが異なる。では下接語の付かない「オーナサル」とこれらの尊敬表現形式との待遇差はどうであろうか。最も用例数の多い「オーナサレマス」が命令形で多く使われることを考慮して、命令形で用いられる「オーナサル」と対人関係の観点から比較してみると、「オーナサル」に付く下接語のバリエーションが増えているだけで待遇差はないように思われる。しかし、次にあげる用例7のように明らかに待遇差に違いが見られる例もある。

7 〔借手が貸手に考え直すようにいう場面〕

先ツ御待被成イ一旦男ノ義理ニハ申夕物デ御座リ是カ御座ル

（八句連歌）借手↓貸手

用例7は用例4と同じ人物関係で用いられている。「オーナサル」の例である。用例4の場合と比べて、用例7では借手は貸手に対して畏まる度合いが薄れていると考えられる。それは、連歌勝負で勝ったことによつて、心理的に優位に立っているためと思われる。つまり、この畏まり度の差が「オーナサレマス」と「オーナサル」との待遇差といえよう。

以上、本章で述べてきたことをまとめると次のようになる。

「オーナサレマス」は『保教本』において最も高い待遇価値を持ち、主従関係やそれに準じる対人関係で主に使用される。

「保教本」には、「オーナサレマス」の他にも「オーナサル」に下接語の付いた様々な形式が見られる。これは『虎明本』・『天理本』と比べて『保教本』の特徴であると考えられる。

三 他流派との比較

前章では『保教本』において「オーナサレマス」が最も待遇価値の高い尊敬表現形式であり、主に主従関係およびそれに準じる関係において使用されることを述べた。本章では『保教本』において「オーナサレマス」の使用されている詞章とそれに該当する他流派の詞章とを比較することによつて、四座に属し、一八世紀初頭までに筆写された狂言台本の中で「オーナサレマス」の多用が『保教本』ひいては驚流の特徴であると考えられる事を論じる。

三・一 『虎明本』・『天理本』との比較

『保教本』が驚流狂言台本の中で、比較的まとまった形で残される最古本であることを考慮して、本節では大蔵流・和泉流の狂言台本のうち最古本である『虎明本』・『天理本』と比較していくことにする。まず、用例からみてみよう。

8 [所の者が大黒天にそばに来るように頼む場面]

(保) 是ハ有難イ仕合テ御座ル此方エ御来臨被成マセイ
(「夷大黒」所の者↓大黒天)

(虎) 是はかたじけなひ御事にて候、先これへ御来臨候へ

(天) さてもくありがたき御事かな、まづこなたへ御通り候へ

9 [入間の某が大名の意志を確認する場面]

(保) 扱某ヲハ真実御成敗被成レウカ (「入間川」入間某↓大名)

(虎) さてはしんじつ御せいはいあらうずるか

(天) やら、こゝろやすや、さらば御せいはいあれ

10 [大名が入間の某を成敗しようとするのを太郎冠者が制する場面]

(保) 先御待被成マセイ御国元テコソ殿ヲ存テ居マスレ爰元杯デハ
存マスマイ (「入間川」太郎冠者↓大名)

(虎) 先またせられい

(天) 申、こゝろをしづめてきかせられい

右の例を見てもわかるように、『保教本』と『虎明本』・『天理本』との詞章が一致する個所では、『保教本』に「オーナサレマス」が用いられているのに対し、『虎明本』・『保教本』においては「オー候」・「オーアル」・「セラル」などが用いられている。『虎明本』や『天理本』など狂言台本詞章が未だ固定されていない時期の狂言台本では

様々な尊敬表現形式が使われていることに対して、一八世紀初頭に筆写された『保教本』では、「オーナサレマス」が多用されているのである。このように『保教本』に「オーナサレマス」が多用されるのは、後述するように近世前期上方の口頭語を取り入れることによって、古典劇化しつつあった一八世紀初頭の狂言を当時の聴衆にわかりやすくするための工夫の一環とも考えられるであろう。

さて、【表三】からもわかるように、『虎明本』などに全く「オーナサレマス」が使用されていないわけではない。

11 [太郎冠者が大名の帰国を国元では心待ちにしていると言う場面]

仰のことくお国もとは、定てお待かねなされまらせう

(「入間川」太郎冠者↓大名)

右の例は「マラスル」という「マス」の古形が使われているが、『虎明本』に見られる「オーナサレマス」の唯一の例である。この例は、『保教本』と同じく主従関係において使用され、待遇価値も高いと思われる。しかし、『虎明本』を調査された山崎久之氏はこの例を特に高く扱うことはせずに、用例数の少ないことなどから「オーナサル」と同じ待遇価値の扱いをしている。この山崎氏の扱いは妥当な判断と思われる。しかし、『保教本』では「オーナサレマス」と「オーナサル」とに明らかな用法差が見出されることから、この両語を一つの段階にまとめることはせずに、【表一】の通り各段階に分類すべきであると考えられる。

三・二 驚流流派内での比較

『虎明本』・『天理本』と比較して、「オーナサレマス」が『保教本』

において多用されている事を述べてきた。しかし、この傾向は『保教本』だけに限られたものではなく、『保教本』と同じ驚流でも流派の異なる『延宝・忠政本』や『名女川本』にも多用されていることが【表三】からわかる。驚流においても大蔵流などと同様に狂言台本詞章が固定・伝承されていくと仮定するならば、『保教本』における「オーナサレマス」の用法や使用状況が『名女川本』では固定されつつあったであろうと予想される。本節では、『保教本』と同じく驚流に属する狂言台本のうち、『保教本』よりも筆写年代がやや下る『名女川本』と比較していくことにしよう。

まず『名女川本』の用法についてみてみよう。『名女川本』では、「オーナサレマス」が66例使用されているが、待遇価値や対人関係の点については、『保教本』と大きな違いはないと思われる。

12 〔粟を食べてしまった太郎冠者が主人に言い訳をする場面〕

中々、先某の別分をお聞被成ませひ、お次へ持て参て焼ふと存て御座れば、
〔「栗焼」太郎冠者↓大名〕

13 〔太郎冠者が舅にいわれて躰を屋敷の中に通す場面〕

畏て御座る、こうお通り被成ませひ 〔角水舞〕太郎冠者↓躰
14 〔甥が伯母の作る酒を分けてくれるように頼む場面〕

こちへそうをせひと被申て御座る程に、そつと斗りお出し被成ませひ
〔伯母が酒〕甥↓伯母〕

『名女川本』において「オーナサレマス」は66例見られるが、その内48例が主従関係およびそれに準じる関係で下位者から上位者に対して用いられており、『保教本』における対人関係と類似した傾向であるといえよう。例えば用例12・13から、下位者が上位者に対して畏まっていることがわかる。用例13は厳密には、主従に準じる関係

ではない。しかし、甥が太郎冠者にとって主人の身内であることを考えて、主従に準じる関係として分類している。また、用例14は甥が伯母に「オーナサレマス」を用いた例である。この例のように「オーナサレマス」を単に位相的な上位者に対しても用いることがある。このような点から用法面においても『保教本』と『名女川本』とは類似していると考えられる。この事実は次のように「保教本」と詞章を比較してみることでもわかるであろう。

15 〔弟子の妻が師匠を屋敷の中に通す場面〕

〔保〕ソレナラハ先カウ御通ナサレマセイ

〔塗師〕弟子の妻↓師匠〕

〔名〕内々承り及ました師匠殿で御座るか先こお通被成ませひ
『保教本』と『名女川本』では所収曲に異同があるが、同一曲で狂言台本詞章が一致する場合は、右の例のように同じ語が用いられる傾向にある。この事から「オーナサレマス」については、『保教本』の使用状況と『名女川本』との使用状況はほぼ同じであると考えられる。

四 近世前期上方の用法

「オーナサレマス」は、『虎明本』に1例のみではあるが、その古形である「オーナサレマラスル」が用いられていることからわかるように、室町時代末期には既に用いられている²⁶⁾。しかしこの形で使用はほとんど見られず、「オーナサル」が多く用いられ、【表四】からもわかるように近世前期上方においては、「オーナサル」が最も高い待遇価値を有しているのである。しかし、時代が下り、一八世紀初頭の近世前期上方では「オーナサル」の待遇価値は低下し、そ

【表四】近世前期上方における対称代名詞の主体待遇表現対応表

動作主	動作主への待遇表現		対者待遇語
	文末表現	行く・来る	
おまえ	おーなされま しやります	お出なされま ござります	られま させ給ふ
こなた	おーなさる	ござる お出なさる	らる しやる
そなた	やる	おじやる 出やる	
そち	やる	行く・来る	
おのれ	おる	うせる	

れに代わるものとして「オーナサル」に「マス」の下接した「オーナサレマス」が最も高い待遇価値を持つものとして多用される。『保教本』において「オーナサレマス」が多用されることの要因の一つに、近世前期上方における口頭語の影響が考えられる。そこで、近世前期上方における用法を、比較的当時の口頭語を反映していると思われる近松の世話浄瑠璃からみてみよう。

16 (手代の茂兵衛が主人の妻さんを励ます場面)

旦那の印判一つ問屋へ持って参れば。江戸為替二貫目や三貫目常住取遣いたします。物ならたつた廿日の間お氣遣なされませぬ。

(大経師昔曆「茂兵衛↓さん」)

17 (宿の亭主が大名の一行を世話する場面)

相宿もござりませぬ廣々と。御休みなさせませ

(丹波與作待夜の「小室節」亭主↓小女郎)

18 (遊女屋の亭主が京に行く治兵衛を見送る場面)
追附お下りなされませ。ようござりまもそこ〜に(下略)

(「心中天の網島」亭主↓治兵衛)

近松の世話浄瑠璃で使われる「オーナサレマス」は、山崎久之氏が指摘するように、近世前期上方で高い待遇価値を有している。右の「オーナサレマス」はその通りの用法であるといえるであろう。用例16は主家筋の人物に対して、用例17・18は店の亭主から、大名家の人物や上層町人に対して、それぞれ「オーナサレマス」を使用している例である。これらの例は下位者から上位者に対する例であり、話手は聞き手に対して畏まった態度で使用していることがわかる。近松の世話浄瑠璃で用いられる「オーナサレマス」と『保教本』での「オーナサレマス」の用法とを比較すると、その場面や話手の聞き手に対する態度などから、その用法の類似性は指摘できる。

五 『保教本』の筆写態度

以上見てきたように、『保教本』では近世前期上方語の「オーナサレマス」を他流派の狂言台本詞章よりも積極的に取り入れていいることが考えられる。狂言台本詞章が固定・伝承されていくと仮定するならば、『保教本』が筆写された当時の口頭語が見られるという状況は、むしろそれに反しているとも考えられよう。本章では、『保教本』が近世前期上方で使用されていた「オーナサレマス」を、多く狂言台本詞章に取り入れていた背景について考察していくことにする。

『保教本』には多くの注記が書かれているが、その一つに「蝸」の末尾に記されるような『保教本』の筆写態度を窺わせる記述が随所に見られる。

文句万昔ヨリノ定メ置通り誤共ニ守本式ナレ共近年諸芸共ニ色々工夫吟味過元ノ流儀失フ事古人ノ様ニ不成ニ依ツテノ故ナリ夫共ニ世間一同ナル故時ニ相応ニシテ本ヲハ不失様スル專一也口傳

(卷四 三三二頁)

右の記述は、普通りの文言に準じるべきではあるが本を失わない程度に世間の風潮に合わせて狂言を工夫することも必要である、と解釈できるであろう。この記述から『保教本』では、文句万昔ヨリノ定メ置通り」の狂言台本詞章を、時と場合に依じて工夫していたと考えられる。『保教本』における「オーナサレマス」の使用状況を、この記述と照らし合わせると、昔から定められていた通りの言葉であるとも考えられよう。しかし、「オーナサレマス」が、『虎明本』などの江戸時代初期の狂言台本詞章にはほとんど見られずに、近世前期上方から使われ出されたことを考慮すると、「オーナサレマス」は「時ニ相応ニシテ」という態度によつて狂言台本詞章に取り入れられたと考えられる。また『保教本』が筆写当時の口頭語を取り入れていたこのような態度は、別の記述からも窺える。狂言台本詞章そのものに関する注記の一つとして、「花折新撥意」の末尾にかかれ「云合仕様傳」を挙げておく。

狂言ニ用ル言葉ハ流々ニ用ル通り委習ノ書ニ記(中略)第一世

上普諸国一同二上下共ニ遣フ言葉ヲ能知りテ工夫シテ吉其分ハ

何茂昔ヨリ通用ル言葉ナル故吉公界ニテ遣フ言葉ニテ能様ニテ

モ其時代ニ用ルハ時花言葉ヲ云同前ナリ(卷三 四三六頁)

右の傍線を施した箇所は、先に引用した箇所と類似した内容であると思われる。ここでは、世間一般に使われている言葉を良く知った上で工夫して狂言に用いても良い、と解釈できるだろう。この二つ

の記述を合わせて考えると『保教本』では、各流派の狂言台本詞章が古典劇化していくにつれて固定・伝承されていくのとは対照的に、『保教本』では狂言台本詞章を伝受していくことを踏まえながらも、伝統にとらわれることなく時に依じて狂言を演じ、狂言台本詞章を工夫していたことを窺わせるであろう。つまり『保教本』に近世前期上方で多用されていた「オーナサレマス」が取り込まれ、驚流を除く各流派の狂言台本詞章と比較しても、「オーナサレマス」が『保教本』のひいては驚流の言語的特徴として認められる背景には、『蛸』の末尾に書かれる記述や「云合仕様傳」のような『保教本』の態度が、大きく関与していたといえるであろう。

六 まとめ

本稿では、次のことを明らかにした。

- イ 尊敬表現形式「オーナサレマス」は、『保教本』の待遇表現体系の中で、「オマエ」段階に分類され最も待遇価値が高い。
- ロ 「オーナサレマス」は、『虎明本』や『天理本』などにはあまり見られないが、『保教本』に多く見られる尊敬表現形式である。近世前期上方で広く使われていたのを『保教本』が取り入れた結果であると考えられる。
- ハ 『保教本』が筆写当時の口頭語を積極的に狂言台本詞章に取り入れる姿勢は、『蛸』の末尾に書かれる記述や「云合仕様傳」から窺える。このような姿勢は、古典劇化しつつあった狂言を、当時の聴衆にわかりやすくさせるための『保教本』の性格とも捉えられよう。

本稿では、近世前期上方から多く用いられていた尊敬表現形式

「オーナサレマス」が、古典劇化しつつあった一八世紀初頭の『保教本』に多く取り入れられている事を指摘すると共に、その背景として『保教本』の狂言台本詞章に対する特徴的な態度が要因の一つとして考えられる事を論じた。狂言台本詞章が固定・伝承されていくといわれている中で、一八世紀初頭に筆写された『保教本』は、「オマエ」や「オーナサレマス」などの近世前期上方の口頭語を取り入れており、他流派とは様相を異にする。一方、『保教本』以降の鷺流の狂言台本では、狂言台本詞章に取り入れている語とそうでない語とがあり、その様相は異なる。今後、『保教本』と『虎明本』、『天理本』とを比較・検討することによって、江戸時代中頃に書き留められた狂言台本詞章の性格を広く明らかにさせることができ、またこれらのことから『保教本』筆写者の意図、さらには『保教本』以降の鷺流狂言台本における詞章の性格というものまでも浮かび上がらせる事が出来ると考えられる。そのような意味で『保教本』は大変興味深い資料であるといえよう。

本稿では、紙幅の都合により述べきれなかった点が多々ある。例えば、鷺流に二派あった内の一派鷺仁右衛門派との関係や、今回扱わなかった狂言台本での様相などである。特に鷺仁右衛門派との関係については今後の課題としたい。

注

- (1) 彦坂佳喜氏「大蔵流狂言『虎明本』から『虎寛本』へ——その待遇表現の変化——」、『国語学研究』14 昭和五〇年。
- (2) 『鷺流狂言台本保教本の待遇表現について——対称代名詞「オマエ」を中心に——』(平成二年度国語学会春季大会発表要旨集)
- (3) 山崎久之氏「室町時代の待遇表現体系」、『国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院 昭和三八年 所収。

(4) 山崎久之氏に倣って、待遇表現体系表に見られる各語群を対称代名詞に代表させてそれぞれ「オマエ」段階などのように呼ぶことにする。

(5) 「表一」「表二」に文末表現として分類している語は、必ず文末に使われると言うわけではないが、便宜上こう呼ぶことにした。

(6) 本稿では、「オーナサレマス」に注目しているために、下接語なしの例は特に取り上げない。

(7) 鷺仁右衛門派最古の狂言台本である。延宝六年(一六七八年)ごろ、筆写。調査に際しては『鷺流狂言台本』延宝・忠政本「翻刻・解説」(田口和夫氏「静岡英和女学院短大紀要」11 昭和五四年)によった。

(8) 注(1)参照。

(9) 鷺仁右衛門派については、吉岡鎮香氏「狂言における対称代名詞の待遇価値の変遷——鷺流狂言の場合——」(『甲南国文』44号 平成九年)の考察がある。氏によると、仁右衛門派では大蔵流などと同様に狂言台本詞章が固定されるという傾向があるという。この結果を踏まえると、必ずしも伝承されない鷺伝右衛門派の状況は興味深い。鷺伝右衛門派内における待遇表現の変遷については改めて考察したい。

本稿で用例として引用した資料は次の通りである。

- ・鷺流狂言台本保教本：享保元年(一七一六年)から享保九年(一七二四年)に書写。引用は『天理図書館善本叢書 鷺流狂言伝書保教本一〇四』(八木書店 昭和五九年)による。
- ・大蔵流狂言台本虎明本：寛永一九年(一六四二年)に書写。引用は『大蔵流明本狂言集の研究 本文篇上中下』(池田廣司・北原保雄氏 表現社 昭和四七年から昭和五八年)による。
- ・和泉流狂言台本天理狂言本：寛永・正保年間(一六二四年から一六四八年)ごろに書写。引用は『天理本狂言六義上下』(北川忠彦・永井猛氏等 三弥井書店 平成六年から七年)による。
- ・鷺流狂言台本宝曆名女川本：宝曆二年(一七六一年)ごろに書写。引用は『翻刻鷺流狂言「宝曆名女川本」一〇六』(北川忠彦・関屋俊彦氏「女子大国文」106号、111号 平成元年から平成三年)による。
- ・近松の世話浄瑠璃は日本古典文学大系「近松浄瑠璃集上」による。